

## 負債関係に働く力学

——台湾中部の地方都市における国際ブローカー婚の互酬性——

横 田 祥 子\*

### Dynamics of Debt: Reciprocity in Cross-Border Brokered Marriage in Taichung, Taiwan

YOKOTA Sachiko\*

Since 1990's, cross-border brokered marriages of Taiwanese men with women from Mainland China and Southeastern Asia are increasing. This stream is an extension of the global division of reproductive work, and flows of human capital and material resources among countries act as catalyst. Taiwanese society and academia have made social issues of female spouses' adaptation and education for the next generation; at the same time, they have made light of the fact that cross-border brokered marriages are important means to establish new family, and to ally new connection abroad. This paper is aimed at structural analysis of reciprocity between in-laws concerned with cross-border brokered marriages. Compared with marriages between two Taiwanese, in the case of cross-border brokered marriages, amount of bride wealth is generally quite small; in addition, dowry is not given by wife's in-laws. Therefore, in Han Taiwanese context, a Taiwanese husband and his family would think that they could get wife for the man for a petty sum, and often describe such marriages with the word "mai"-literally "buying a bride". A wife's in-laws abroad couldn't contribute to husband's family's rites of passage, which are originally a crucial role of a wife's in-laws. Those in-laws wouldn't gift ceremonial goods to husband's family at all-maybe because of physical distance and cultural gaps. Such relationships among

---

\* 日本学術振興会（東京外国語大学）；Research Fellow, Japan Society for the Promotion of Science/Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1, Asahi-cho, Fuchu, Tokyo, 183-8534/ sachikoyokota@gmail.com

in-laws are not ideal ones from the standpoint of Han Taiwanese. Still, Taiwanese husbands would be requested to keep gifting to their wives' in-laws goods such as real estate, home electrical appliances, and so on. Continual gifting by Taiwanese husbands is sort of like paying bride wealth on time. On the other hand, foreign wives would reciprocate their husbands and husbands' family by contributing to both the husbands' economic production and reproductive work, by means of bearing boys, doing agricultural work and housework, and helping businesses. At the point when foreign wives and their family become satisfied with the gifts, one-way gift are ended.

キーワード：台湾，漢族，国際ブローカー婚，再生産労働，互酬性，婚資

Keywords: Taiwan, Han Chinese, Cross-Border Brokered Marriage, Reproductive Work, Reciprocity, Bride Wealth

## I 台湾における国際ブローカー婚の背景と本論の目的

### 1 はじめに

台湾では1990年代以降、中国や東南アジア諸国出身の女性と台湾人<sup>1)</sup>男性との結婚が増加している。台湾に居住している元／現外国籍配偶者<sup>2)</sup>は、1987年1月から2010年9月までの累計で、336,872人（男22,766人、女314,106人）に上っている〔内政部入出國及移民署と戸政司2010a〕。外国人配偶者の出身地、および人数は、ジェンダー別に異なる特徴を見せており、夫—台湾人、妻—外国人のカップルが圧倒的多数を占めている（表1参照）。このような傾向は、台湾での国際結婚が「あまり発展していない場所から、徐々に発展しており、あまり孤立していない場所へ、または貧しくあまり発展していない地球の南から、豊かな北へと花嫁が移動する」、「グローバル・ハイパガミー（global hypergamy）」〔Constable 2005: 10〕に相当していることを示している。また、こうした国際結婚の内、相当数が専門仲介業者の斡旋を経ていると思われる。そこで本論では、仲介業者による仲介を通じて成立した国際結婚を、「国際ブローカー婚<sup>3)</sup>（cross-border brokered marriage）」と呼ぶこと

1) 本論における「台湾人」とは、エスニシティを問わず、中華民国出身の人々を指す。特に漢族だけを指す場合は、「台湾漢族」を用いる。

2) 本論における「外国籍配偶者」とは、中華人民共和国出身者その他の外国出身者を含める。

3) 国際結婚の斡旋は、台湾側、女性の出身地側の仲介業者と末端のリクルーターの連携で成立している〔cf. 王 2001〕。筆者の調査地の仲介業者は、台湾人の妻となった外国籍配偶者をリクルーターとして雇用し、彼女たちの社会的ネットワークを通じて、次なる配偶者

にする。

従来、国際ブローカー婚については、国際ブローカー婚の成立をめぐる世界経済システムというマクロ要因、ブローカーというメゾ・レベル要因、そうしたマクロ要因に抗するミクロな行為遂行主体としての女性の実践に着目するという三つの視点から分析がなされてきた〔cf. 夏 2002; 王 2001; Wang 2007〕。あるいは台湾国内に限れば、外国籍配偶者のホスト社会への適応、社会統合を目的とした研究が大量になされてきた。配偶者の社会統合が急務であることに異論の余地はないが、国際ブローカー婚の諸側面が社会問題として顕在化している事象に底流しているメカニズムについても目を向ける必要がある。国際ブローカー婚が「人身売買」とみなされるのはなぜか、外国籍配偶者の生家への送金をめぐるトラブルはなぜ生じるのか。本論はこうした問いに回答するために、国際ブローカー婚を支える互酬性についての試論とする。なお、本論で用いる「負債」とは、財の交換が媒介する人と人との関係性の維持や互酬関係の継続に作用するものであることを断っておく。

表 1 元／現外国籍配偶者人数累計（1987 年 1 月－2010 年 9 月）<sup>4)</sup>

	総計	中国	ベトナム	インドネシア	タイ	フィリピン	カンボジア	日本	韓国	その他
男	22,766	10,658	238	423	2,391	420	2	1,539	289	6,806
女	314,106	180,243	83,478	26,392	5,546	6,379	4,321	1,701	727	5,319
計	336,872	190,901	83,716	26,815	7,937	6,799	4,323	3,240	1,016	12,125

## 2 国際ブローカー婚増加の背景

国際ブローカー婚の増加は、マクロな文脈においては、グローバリゼーションと先進諸国における就労構造や、ライフスタイルが変化したことによる「再生産労働

候補を募集し、台湾人男性に紹介している。台湾側仲介業者は、顧客を女性の出身地に連れて行き、膨大な数の女性と面談させ、その中から数人を選ばせて、通訳を介して互いに質問をする。二日目には小旅行に出かけ、双方が結婚の合意に達すれば、三日目に披露宴を執り行う。その後、結婚登録の手続きを経て、台湾人夫だけ先に帰国する。現地側仲介業者が、結婚、出国に関する書類の作成や手続きを担当する。外国籍配偶者は、管理者の下、ビザ発給までの間、集団生活をして中国語、台湾料理の調理方法を学習する。

- 4) 「各県市外籍配偶人数按性別及原属国籍分 99 年 9 月」内政部入出國及移民署と戸政司 [2010]から筆者が作成。本表は 1987 年 1 月から 2010 年 9 月までに台湾人と結婚した、外国籍配偶者（帰化者を含む）の累計を男女別、国別に示したものである。

者」の欠如によるものである [cf. Sassen 2002: 254]。再生産労働者には、「越境結婚 (cross-border marriage)」, 家事労働者, サービス労働者, セックスワーカーが挙げられる [Truong 1996:33]。

台湾も再生産労働の国際分業化の潮流の真ただ中に位置している。台湾政府は、1980年代末から外国人労働者を生産部門で導入し、1992年には再生産部門にも海外から家事・介護労働者の導入を開始した。2010年9月現在、外国人労働者の数は319,885人に上る [内政部入出國及移民署移民事務組 2010]。他方、国際ブローカー婚は、1970年代末期、外省人の退役軍人にインドネシア・西カリマンタン州の華人女性を結婚相手として斡旋したことに始まる [夏 2002: 58]。続く1987年、戒厳令解除と同時に、台湾人の大陸への親族訪問が解禁され、長年家族や親戚と離別していた外省人退役軍人が故郷を訪問し、大陸系女性と結婚する例が増加した [朱・劉 2005: 180]。戒厳令解除は、本省人にも中国でのビジネス・チャンスを生み出し、自由恋愛、あるいは仲介業者の斡旋を経て、本省人男性と大陸系女性との結婚も増加した。当初、大陸系女性との結婚は外省人に多く見られたが、現在では台湾人配偶者側のエスニシティに顕著な偏りは見られない [朱・劉 2005: 180]。

1990年代後半以降、急増しているのがベトナム人女性との結婚である。台湾、ベトナム両国は、南北ベトナムが統一された1975年に国交を断絶したが、1987年に台湾企業がベトナムで工場建設を進め、経済進出を果たしたことを皮切りに、両者は経済的に密接な関係を築いていった。1993年、インドネシア人配偶者に対するビザの発給に時間を要するようになり、早く女性を呼び寄せたいという台湾人の要望を受けて、仲介業者は新たな女性の供給源をベトナムに求めた [夏 2002: 169]。なお、ベトナム人配偶者のエスニシティは、1999年に結婚したケースへの調査では、「父親がベトナム人である割合は78%、華人の割合は22%」であった<sup>5)</sup> [王 2001: 107]。王は「ベトナム人」の下位分類までは示していないが、おそらくキン族を指しているものと推察される。こうした国際ブローカー婚急増の背景には、先進諸国と同様に女性の高学歴化と労働参加率の上昇、離婚率の上昇があると指摘されている [Davin 2007: 94]。

国際結婚は2003年にピークを迎え、国際結婚の新規結婚件数が全体の31.86%を占めるまでに成長したが、偽装結婚や国際結婚家庭の貧困化を未然に防ぐため、政府は結婚の真偽、および台湾人男性の扶養能力についての審査を厳格化した。その結果、国際結婚は2004年には全体の23.82%、2005年20.14%、2006年16.77%、

5) ベトナム人女性配偶者の母親のエスニシティは、84%がベトナム人、16%が華人であった [王 2001:126]。



2007年18.29%, 2008年14.03%, 2009年18.71%, 2010年9月までの年平均15.84%へと低下している〔内政部戸政司 2010〕。さらに、政府はブローカー婚が人身取引の温床となることを阻止するため、2007年に婚姻仲介サービスの無償化を義務付け、実質的に婚姻仲介業を非合法とした。

以上、国際ブローカー婚が台湾で増加した経緯についておおまかに振り返った。冒頭でも示した通り、国際ブローカー婚をめぐる先行研究では、国際社会学、経済学分野から、その世界経済システムとの連関、台湾と中国、東南アジア諸国との人的、物的交流史〔cf. 夏 2002〕、仲介システム〔cf. 王 2001〕についてアプローチがなされ、教育学、社会福祉学分野から、外国籍配偶者の適応、子弟の教育支援などのテーマについて研究〔cf. 葉 2006; 張 2007〕が蓄積されてきた。しかしながら、国際ブローカー婚についての文化人類学的研究は少なく、ましてやブローカー婚を一つの結婚形式として捉え、結婚生活を成り立たせている夫婦間、姻戚間の互酬性についての分析はされてこなかった。国家間の圧倒的経済格差を背景とし、独特の仲介プロセスを経て誕生した結婚は、予め家格や経済的条件の相当が見極められた台湾漢族同士の結婚とは、結婚前、結婚後の姻族間の互酬性の在り方が異なっている。その詳細を明らかにすることで、国際ブローカー婚に対する諸批判が何に由来するものなのかを紐解くことができる。そこで本論は、国際ブローカー婚の互酬関係をめぐる構造についての試論としたい。ただし、国際ブローカー婚の社会構造分析では十分ではない。移動する主体である女性とその夫にとって、世界経済システムというマクロな潮流の中に、自分たちの結婚が位置づけられるとしても、結婚、移動を選択・決定し、家族を形成・維持していく過程は、まさに彼らの主体的選択・決定の積み重ねであったはずである。そこで、ミクロな行為主体が構造に働きかけるレベルについても注目する必要がある。

以下では、第二節にて、国際ブローカー婚で交わされる婚資と持参財を台湾漢族同士の結婚と比較し、台湾漢族の文脈において国際ブローカー婚はいかなる種類の結婚であるのかを議論し、第三節では、国際ブローカー婚の夫婦、姻戚間の互酬性に着目し、「負債」関係の維持、解消をめぐって、いかなる力学が働いているのかを議論する。以上の検討を通して、国際ブローカー婚で結ばれた夫婦が、互酬的關係をいかに結び結婚生活を運営しているのかを描き出したい。

## II 国際ブローカー婚の婚資と持参財

### 1 調査地 Z 町

本論が依拠する調査データは、筆者が 2004～2005 年、2007 年、2010 年にかけ

て台湾中部台中県の Z 町にて断続的に行った調査に基づいている。Z 町の人口は 2010 年 9 月現在、53,313 人（男 27,690、女 25,623）である。

国際ブローカー婚とその家族について調査するにあたり、Z 町を調査地に選定した理由には、Z 町のエスニシティ、産業の特徴に注目したためである。かつて Z 町一帯は、オーストロネシア語族系のパゼヘ族やタイヤル族の活動領域であったが、18 世紀以降、広東省嘉応州茶陽（今日の広東省大埔県）出身者が今日の Z 町に入り、農地の開拓を進めた。開拓民は客家人の多い嘉応州出身であったため、Z 町では今日に至るまで客家人が多数を占めている。

台湾全体に占める客家人の人口は、一説には約 19.5%に上ると言われている〔陳運棟 2007: 33〕。とはいえ、客家人は台湾漢族の中ではマイノリティであり、1980 年代後半に客家人による文化復権運動が開始するまでは、客家人が客家人アイデンティティを公的に表明することは憚られていた〔cf. 申・邱 2004〕。ことにマジョリティを占める閩南人から、結婚相手として客家人は忌避されていたという。Z 町を含め、中央山脈沿いに広がる客家人居住地域においては、国際ブローカー婚の女性配偶者の内、インドネシア出身者の割合が全国平均に比べて高い<sup>6)</sup>。これは、インドネシア出身の女性配偶者の多数が、客家人の多い西カリマンタン州出身の華人であり、台湾側客家人も客家語が話せる女性を望んだことと密接に関係している。国際ブローカー婚は台湾全域で見られる現象とはいえ、ローカルな文脈に応じて女性配偶者のエスニシティや言語運用能力を考慮している点が興味深い。

また、Z 町の主要産業は農業であり、海拔の高さ（400～1,000 メートル）と平野部と山岳部の高低差によって生じる寒暖の差を活用し、亜熱帯に位置しながら温帯果実の栽培をおこなっている。栽培種目は、梨、葡萄、桃、柿などである。一般に、農村では女性が就学、就職、結婚を機に農村から都市へ流出する確率が高く、農村男性が結婚難に見舞われる傾向がある。エスニシティ面の特殊性に加え、主産業がもたらす結婚市場での劣勢という特徴に注目し、調査地として Z 町を選定した。

2004～2006 年の 3 年間の Z 町の結婚件数および出身国別花婿数、花嫁数についての統計によると、花婿数は、2004 年 321 人、2005 年 298 人、2006 年 303 人の台湾人が結婚した。外国籍の花婿は、2004 年に日本人、カナダ人、ニュージーランド人男性が 1 人ずつ、2005 年は中国人、アメリカ人が 1 人ずつ、タイ人 2 人、2006

6) 1987 年 1 月から 2008 年 6 月末までの外国籍配偶者人数の累計では、インドネシア出身の女性が占める割合は、全国平均 20.36%である一方、客家人人口が多い各県では、新竹県で 48.65%、苗栗県 38.62%、花蓮県 29.68%、新竹市 29.34%に上る〔内政部戸政司 2008〕。Z 町が位置する台中県全体でインドネシア出身の女性が占める割合は、全国平均とほぼ変わりがないが、Z 町が苗栗県に隣接し、台中県有数の客家人居住地区であることから、共通の傾向を持つと考えられる。

年は日本人男性が1人結婚登録を行なった。

一方、花嫁の人数は、台湾出身者が最も多く、2004～2006年の順にそれぞれ240人、255人、251人である。中国、インドネシア、ベトナムからは毎年一定数以上の花嫁が婚入している。その数は、同様にそれぞれ、中国28人(花嫁全体の8.6%)、25人(8.3%)、28人(9.2%)、ベトナム40人(12.3%)、11人(3.6%)、12人(3.9%)、インドネシア8人(2.5%)、5人(1.5%)、13人(4.3%)となっている〔内政部戸政司2004、2005、2006〕。

2004～2006年にかけての全国における女性の外国籍配偶者の比率は、年毎にそれぞれ中国7.9%、9.9%、9.6%、東南アジア諸国13.1%、7.6%、4.5%で、Z町の結婚件数割合は全国平均とほぼ同様の推移を示している。

なお、調査では主に標準中国語を使用した。また、調査に協力していただいた外国籍配偶者は26人で、彼女たちの家族からも話を伺った。

## 2 漢族における婚資と持参財の意義

筆者はZ町での調査中、国際ブローカー婚がしばしば次のように語られるのを耳にした。

「(国際ブローカー婚の)嫁たちは『買われて』きたのだから、それなりの処遇を受けても仕方がない。」(30代、女性、会社員、家族に外国籍配偶者はなし)

「『買ってきた嫁(国際ブローカー婚の女性配偶者を指す)』は問題が多い。やはりもらうなら私たち台湾人<sup>7)</sup>の嫁が良い。」(60代、女性、農業、嫁にインドネシア華人1人、ベトナム人1人がいる。)

日本語を母語とする読者は、「買ってきた」という表現から人身取引を連想するかもしれないが、台湾漢族の文脈においてはそうではない。これは婚資に対する持参財の反対給付の規模に基づく、結婚の種別を表したものである。実はこの「買う」という表現こそが、国際ブローカー婚の位置づけを如実に表している。

ここではまず、婚資・持参財の意義について振り返ることにしよう。一般に婚姻時の贈与交換の意義は、第一に赤の他人を姻族として同盟関係を結ぶことにある。従って、財と交換される女性は純粋に財と等価であるわけではなく、夫方から妻方

---

7) 発言中の「台湾人」は台湾漢族を指していると思われる。

へ財が送られても、それによって妻は買われた訳ではない〔リーチ 1991: 509〕。第二に、妻方が被った精神的・経済的損失を補填する意義を持つ。また、通常その社会において中心的な経済的資本が交換され、贈与交換を通じて獲得した財は受け手の重要な収入源になりうる。

姻族間の互酬性について、植野は台湾の姻戚関係が父系出自の連続と家族展開において儀礼的・経済的に不可欠であることを指摘している〔植野 1987, 2000〕。漢族社会では、姻族間の互酬性の中でも、婚資や持参財の反対給付の割合は、結婚の種類や妻の地位を表出するものとして極めて重視してきた。漢族の結婚では、婚資「聘金」(*pin jin*)は結婚の絶対条件である一方、持参財「嫁粧」(*jia zhuang*)は結婚の成立条件ではなかった〔中生 1991: 176〕。つまり、国際ブローカー婚のように持参財が支払われなくても、結婚は成立してきた。しかし、かりに婚資がすべて現金で支払われ、持参財が贈与されない場合、華北地域では「嬪売」(*pin mai*, 側室を売る)と表現された〔中生 1991: 173〕。香港でも、内縁の妻として女性を家に迎え入れる場合、正妻には贈る儀礼的財を贈らず、婚資も現金で支払われ、生家は女性に持参財を持たせなかった。このような結婚は「買」(*mai*, 買う)と表現された〔Watson, R.S. 1991: 236, 239〕。以上の例は、持参財の意義を明示しており、今日の国際ブローカー婚においても多くの示唆を与えてくれる。

婚姻贈与が不均衡な台湾のケースについて、日本植民地時代では以下のとおり記録されている。

台湾の花嫁の形態財産は上流者に於ては内地と殆んど同様で、聘金は仮令決定して男家より持つて来ても、其の一部を取つて之を返すか、又は一時之を受け取つて嫁入りの際持参金とするものもあり、或は其の外に債権、現金又は土地を分與して嫁入りさすものもある。現在南部方面では之に近い習慣となつて居るものが少なくない。然るに中流以下に於ては娘を高額の聘金を取つて嫁入され、之を以て利益を得んとする者が少なくない。之等の中には、聘金は全部受取つて返さないのが多いのである〔鈴木 1934:150-151〕。(下線は筆者による。)

鈴木 の指摘からは、持参財の多寡、有無は階層によって異なっていることが分かる。Z町での結納金返却については、以下の記載がある。

聘金は女性の家長に贈るものである。各人の意思に従い全額受け取るか、あるいは全額返上する。古人は聘金は全額返上することが、女性側の家長として最上級の誠意を表す行為であると考えていた〔陳炎正 1995: 34〕。(筆者訳。)

日本植民地時代において上の記述がどれほど蓋然性を持っていたのか、階層別に検討する必要があるが、上流階層のように婚資に相当する持参財を持たせることを理念上のモデルとしていることが分かる。この均衡関係を文化人類学的に読み直すと、婚資の贈与は花嫁を失った妻方の損失を補填する意義があるのに、妻方が受け取らなければ、夫方は嫁の代償としての返済が完了しない。したがって、夫方は妻方に「負債」を負い続けることになる。リーチが「長続きのする関係は、借りがあるという感情としてのみ、存在する」[リーチ 1991: 203]と言うように、姻族は長期にわたる負債関係を構築することで、安定した関係の継続を図っていく。つまり、先の理念モデルは、安定した姻族関係を作り出しているのである。

妻の生家は結婚後も娘の婚家に対し、様々な儀礼的財を贈る。結婚後初めての里帰りから戻る際、出産、子供の成育儀礼、分家の際には、妻の生家は儀礼的財や現金等を婚家に贈与しなければならない[植野 2000: 248-262]。妻の生家が贈与することで、生家の存在を婚家に示すことができ、妻自身も面子を保つことができる。また、葬儀においては、嫁の兄弟は不可欠な存在である。この「母舅」は、出棺前、最後に棺桶のふたに釘を打つ。これは、亡くなった自分の姉妹が不当な扱いを受けて死亡したのではないか、その死因を確かめるためであるといい、「母舅」が埋葬に同意しないと葬儀が終了しない。このように、妻の生家は夫にとって、人生儀礼において不可欠な存在であるとともに、妻を通じ直接、夫婦に財を提供してくれる後ろ盾となる。

では、妻をもらうことで負債を負い、さらに妻の生家から継続的に財の提供を受ける夫は、妻の生家にいかなる貢献をなしているのだろうか。夫は妻の生家、ことに岳父母に対し、様々な場面で贈与、あるいは貢献をしなければならない。例えば、娘婿は結婚後一年目の正月に妻が里帰りする際に同行し、岳父母や妻の兄弟の子供たちに「紅包」(*hong bao*, お年玉)をあげなければならない。その後も、たびたび妻の里帰りに同行し、岳父母を訪れるのがよいとされている。そのほか、岳父母が旅行に出かけたり、病気の治療が必要になったりした場合や、妻の生家で婚礼、新築祝いがなされる場合は、娘婿は多額の祝儀を贈る。また、妻の生家がある村の廟を再建する際には、再建費用として寄付を行う。特に娘婿の貢献が顕著なのは、岳父母の葬儀においてであり、葬儀費用のかかなりの割合が、娘婿からの香典で賄われる[植野 2000: 277-301]。また、娘婿は妻の兄弟に対しても、社会的活動を積極的に援助する存在である。つまり、結婚時にかりに婚資額以上の持参財が贈られ、夫方は妻方に「負債」を負う状態でスタートしても、夫は妻方姻族に対し、奉仕や積極的な支援を提供することで返礼している。妻方も、孫や夫方の人生儀礼に儀礼

的財を贈与し続けることで、互酬性を保っているのである。夫婦間、姻戚間の互酬性が、国際ブローカー婚においてはいかに展開されているのかについては、第三節で述べることにする。

### 3 婚資、持参財の内容の比較

では次に、国際ブローカー婚の婚資や持参財の規模を見ていこう。台湾では、婚姻締結時に、夫方の経済規模を示す「大聘」(*da pin*)と「小聘」(*xiao pin*)という二種類の婚資を妻方に贈与することが一般的である。今日、Z町でもそうした慣習になっているが、1950年代まで客家人同士の結婚では結納金は一種類しかなく、後に閩南人の習慣に習ったと伝えられている。「大小」二種類の結納金の内、妻方は「小聘」を受け取り、「大聘」を夫方に返還することが暗黙の了解になっている。妻方の父母は授受した「小聘」の一部、あるいは全額を持参財として娘に持たせる。父方親族は妻方親族から返還された「大聘」を結婚後に若い夫婦に贈与し、夫婦の財産とすることが多い。

表2は、台湾漢族同士の結婚にかかる費用と国際ブローカー婚7例にかかる費用を比較したものである。なお、台湾漢族同士の結婚にかかる費用は、1996～2006年にZ町A地区出身の男性が台湾漢族と結婚したケース5例を元に算出している。

この婚姻時の贈与交換のバランスは、国際ブローカー婚と台湾漢族同士の結婚では大きく異なっている。例えば、2006年に結婚した事例では、「聘金」は「大聘」が360,000NTD<sup>8)</sup>(約128万円、2006年1月1日のレート1NTD≒3.5868006日本円、以下同様)、「小聘」は120,000NTD(約430,416円)であった。また、「喜餅<sup>9)</sup>」(*xi bing*)は10,500NTD(約376,614円)、宝飾費は6両(約178,800NTD=約641,319円)であった。披露宴には500人招待したので、費用は約15万NTD(約538,020円)かかった。すべて合計すると、913,800NTD(約3,277,618円)にのぼる。また、持参財としては寝具、花婿が結婚式にて着用するスーツ、シャツ、ネクタイ、時計、革靴、洗面器、鏡台などである。ほか、写真代5～6万元(約179,340-215,208円)を負担する。しかし、親と同居の場合、家電用品はどの家にもほぼ揃っているため必要とされない場合もある。

他方、国際ブローカー婚では、結婚にかかる総費用はすべて台湾漢族男性側の負担で、結婚仲介費用を一旦仲介業者に支払い、仲介業者がその費用から現金4,000

8) NTDは新台幣ドルの略。

9) 「喜餅」とは、花嫁が婚約の報告として親族や友人、同僚などに配る菓子である。従来は大きな月餅のような外観で、中には肉の餡が詰められていたが、近年は西洋菓子のクッキーを代用品として贈ることが多い。

－3 万 NTD (約 14,347・107,604 円) を妻方親族に支払う (表 2 参照)。この金額は、

表 2 婚姻締結時の費用内訳

台湾人同士の結婚		国際ブローカー婚	
夫方支出項目	金額	夫方支出項目	金額
「大聘」	36－64 万 NTD (約 1,281,600－ 2,278,400 円)	－	－
「小聘」	7－36 万 NTD (約 249,200－ 1,281,600 円)	「結納金」に相 当する現金	4,000－3 万 NTD (約 14,347・107,604 円)
「喜餅」	10.5 万 NTD (約 376,614 円)	－	－
宝飾費	金 3-6 両 (約 89,400－ 178,800NTD、 320,659-641,319 円)	宝飾費	金 1 両 (約 106,088 円)
披露宴費	81,000－ 150,000NTD (約 290,530－ 538,020 円)	披露宴費	？
－	－	飛行機代、書類 作成費など	6.5 万 NTD＋ $\alpha$ (約 233,142 円＋ $\alpha$ )
－	－	幹旋費用	2 万 NTD (約 71,736 円)
総計	705,400－ 1,328,800NTD (約 2,153,515－ 4,766,140 円)	総計	25－60 万 NTD (約 896,700－2,152,080 円)

\*レートは便宜上、2006 年 1 月 1 日のレート、1 新台幣ドル≒3.5868006 日本円を適用。

花嫁の出身国の通貨力というよりも、仲介業者の裁量によって決定されるようである。そのほか、金 1 両<sup>10)</sup> (29,800NTD, 約 106,088 円) が夫から妻へ贈られる。この場合、仲介業者が支払う現金と結婚指輪などの金の宝飾品が、夫方から妻方へ贈与される「婚資」に相当すると思われる。しかしながら、筆者の調査中、Z 町の人々が件の現金を「聘金」(結納金)と呼んだことはない。台湾漢族男性配偶者は「仲介業者が彼ら(姻族)に〇〇元あげたようだ」と述べる程度で、具体的金額を知らず、

10) 「両」とは中国で生まれた質量単位である。今日、台湾では 1 両は 3.75 グラムに相当する。

なおその現金がいかなる種類のものなのかを明言しない<sup>11)</sup>。

表2から、結婚にかかる総費用は、台湾漢族同士の結婚が705,400-1,328,800NTD(約2,153,515-4,766,140円)であるのに対し、国際ブローカー婚は25-60万NTD(約896,700-2,152,080円)である。台湾漢族同士の平均的結婚費用が、1,017,100NTDとすれば、国際ブローカー婚の平均的費用は250,000NTDとなり、約767,100NTDの差額が生じる。また、結納金に注目すれば、国際ブローカー婚の結納金は台湾漢族同士の結婚の5.7-8.3%に留まる。結納金「小聘」と宝飾費用の合計は、台湾漢族同士の結婚が159,400-538,800NTD(約569,859-1,922,919円)に上る。国際ブローカー婚では33,800-59,800NTD(約121,233-214,490円)で、台湾漢族同士の結婚の11-21%に留まる。

他方、持参財についてみると、2006年、台湾漢族同士が結婚した例では、結婚式で新郎が着用するスーツやネクタイ、革靴などと寝具一式、写真代5-6万NTD(約179,340-215,208円)が準備される。家具や家電一式が必要な場合は、それらが加わることもある。その一方、国際ブローカー婚では特に持参財と呼べるものは伴わないので、女性の身体そのものが持参財になる。

以上、本節では婚姻締結時に交換される婚資および持参財と、結婚にかかる費用について以下の点が明らかになった。一、台湾漢族同士の結婚と国際ブローカー婚との婚資額、結婚費用は大きく差があること、二、国際ブローカー婚では持参財が欠如している、あるいは女性自身が持参財とみなされる、という二点である。台湾漢族同士の婚姻の場合、婚資一に対して持参財は一、あるいはそれ以上を返還するのが理想的である。夫方は妻を貰う代わりに婚資を妻方姻族に贈り、その精神的、経済的損失を埋め合わせようとする。しかし、妻方は妻を与え、婚資と同額以上の持参財を贈ることにより、夫方に負債を返還させない。台湾漢族では、この状態で結婚生活をスタートさせるのが望ましいとされている。

他方、国際ブローカー婚では、夫は台湾漢族に贈るよりもずっと小額の婚資を妻方姻族に贈って、妻方が被った損失を埋め合わせようとする。その一方、妻方は娘

11) 飛行機代、結納金を含めた費用は、25-60万NTDというように、仲介業者により開きがある。夫方は費用細目を把握しておらず、仲介業者が妻方に渡す結納金の金額を知らないことが多いため、結婚後のトラブルの元になっている。例えば、表2でも示したように、結納金として4,000NTDしか受け取っていない女性もあり、女性は結婚後、結納金の金額が台湾でははした金であることを知り、仲介業者に腹を立てるケースがある。またその一方で、仲介費用が60万NTDを支払ったケースでは、結婚後、支払金額が平均よりもかなり高額であったことが判明し、夫方は妻方に対し「不当に結納金を釣り上げた」と不満を抱くことになった。実際には、大半が仲介業者の懐に入っているにもかかわらず、言語、文化の障壁に隔てられた姻族は、結婚時に細目および金額について直接協議せぬまま、仲介業者の指示通り支払い、また受け取ることになる。



を夫方に与えるが、娘に持参財を持たせない。ここで、双方は台湾漢族にとって望ましい「負債」関係を作りだせていないように見える。妻方は、台湾漢族にとっては極めて少ない婚資で娘を夫方に引き渡し、夫方は妻方から妻以外の返礼を受けず、結婚に伴う儀礼的財の提供も受けないことから、完全に妻を入手した気になる。「嫁を『買ってきた』」という表現は、小額の婚資で女性を入手した点、持参財が欠如している点に基づいた認識なのである。

しかしながら、国際ブローカー婚の場合、結婚後も夫方は妻方へ金銭を贈与し続けることが求められるのである。次節では、国際ブローカー婚の夫婦、姻戚間の負債関係がどのように交渉されているのかについて記述する。

### III 「負債」調整に働く力学

#### 1 「負債」関係、結婚、交渉

漢族の姻戚の間では、人生儀礼において妻方から夫方へ儀礼的財の贈与が行われる一方、夫方からは岳父母や妻の兄弟へ奉仕や支援が提供されるなど、互酬的關係が形成されている。しかし、国際ブローカー婚の場合、妻方姻族は国境を越えて居住するなど地理的な隔たりがある上、そもそも習慣、規範を異にしているためか、儀礼的財の贈与は皆無に等しい。むしろ、結婚後も夫方から妻方へ一方的に現金や物品が贈り続けられているように伺える。こうした関係は、漢族の姻戚関係の理念モデルに即すると望ましい関係とは言い難い。

ここでは、三つの事例を基に、国際ブローカー婚の夫婦、姻族の、結婚後の贈与をめぐる交渉過程を三つの事例を基に検討する。事例1は、国際ブローカー婚に特有の負債関係をめぐって、負債の解消が見込まれた例、事例2は、妥協点を模索中の例、事例3は、妥協点が見いだせず、結婚が破綻した例である。また、以下の人物名は全て仮名である。

#### 【事例1】同じ農村出身者として支えあう

黄氏（2004年当時39歳、男性、客家人）とリー（30歳、女性、ベトナム・カントー省出身、キン族）は梨栽培をしている。黄氏の家族は、両親と第一人、姉二人からなる。父親は弟夫婦と、母親は黄氏夫婦と同居し、兄弟それぞれが一人ずつ親の面倒をみている。一見別居に思える居住形態は、兄弟が等しく親を扶養、介護するという習慣を応用したものである。その弟もまたベトナム人女性と結婚している。黄氏は、リーと結婚する前、ベトナム人の前妻と台北郊外に住み、工場勤務をしていた。しかし、Z町に住む両親が農業から引退するので、家業を引き継がねばなら

なくなり、Z町に戻ってきた。しかし、前妻は日焼けする農作業を嫌い、一切夫を手伝わなかった。そのことで前妻と姑はしばしば口論していた。ついには前妻が姑の貴金属を盗むという事件が起こった。前妻は、2000年に長女を出産して一週間後に、乳飲み子を残したまま、突如単身でベトナムに帰ってしまった。黄氏は、自分一人では赤ん坊を育てることはできないので、前妻に代わって赤ん坊の面倒を見てくれる人を確保せねばならないと考えた。そこで彼は、トラブルが絶えなかった前妻と離婚し、別のベトナム人と再婚することを決めた。前妻は子ども二人のうち一人を引き渡すように要求したが、黄氏はその要求に応じなかった。黄氏が500ドル（約5万円）を前妻に渡したところ、前妻は金を受け取り、要求を撤回した。姑によると「前妻は悪い人で、台湾に来たのも金が目当てだった」という。

黄氏とリーはホーチミンにて、仲介業者の紹介で知り合った。リーはカントー省の出身で、両親と女3人、男5人のきょうだいの内、5番目の子であった。彼女は高校を中退した後、洋裁を習い縫い子として働いてきた。リーは黄氏が再婚であり、連れ子がいることを承知で結婚に応じた。二人が結婚して、ビザの発給を受けてリーがZ町に到着したとき、長女はまだ6カ月だった。彼女は他の女性が産んだ子供であっても、面倒をみることにさほど抵抗感を感じなかったという。黄氏は、前妻との間に息子と娘が一人ずついたので、リーとの再婚では子供は欲しくなかった。しかし、妻が出産を切望したので、その願いを聞き入れた。

リー一家は、繁忙期には朝早くから果樹園に出かけ、夕方まで作業を行う。原生種の梨の木に日本から輸入した芽を接ぐ作業、果実に袋を被せる作業、収穫の三つの時期には、夫婦二人だけでは作業しきれない。そのため、繁忙期には臨時にZ町の農家の主婦や友人を雇う。午前中の仕事を終えると、農機具庫を兼ねた休憩所で、手伝いに来てくれた人々に昼食をふるまう。昼食の準備はリーが担当する。彼女は業務用の中華鍋をドラム缶の上に置き、手際よく炒め物を何品も作っていく。

夕方、作業を終えて家に戻ると、リーは夕食の準備と3人の子供たちを風呂に入れる。さらに洗濯は夜のうちにせねばならないというZ町の習慣にならい、一家分の服をバイクに乗せて泉水が湧く洗濯場へと持っていき、洗わなければならない。彼女は農作業を積極的に行い、ナシ栽培から農作業を補助する日雇い労働者の世話や管理、ナシ販売まで目覚しい能力を発揮している。夫も、妻は自分よりも勤勉で有能だと感心し満足している。

リーは毎年梨の収穫を終えた農閑期の6~7月に、ベトナムに里帰りする。かつては毎回現金を持って帰っていた。しかし、黄氏は自分たちが姻族の生活すべて面倒をみることはできないと考えて方針を変更した。彼が出資し妻の名義で土地を購入し、妻の実家に管理を任せることにした。もともとリーの生家は小作人で、土地

を所有していなかった。黄氏は 10 ヘクタールほどの農地を妻の家族のために購入した。また、黄氏は自身も農家であることから、ベトナムに行った際には義父母に農業指導を行っている。

【事例 2】送金の妥協点を探って

蘇氏（2010 年 44 歳、男性、客家人）とホン（25 歳、女性、インドネシア華人かつ客家人）は、2010 年に結婚 6 周年を迎えた。蘇氏は Z 町で生まれ育ち、高校を卒業し兵役を終えた後に実家の一部を改装して檳榔店を開いた。彼は兄一人、姉三人という兄弟の末っ子である。檳榔とは一種の噛みタバコであり、漢族では男性にみられる習慣であるため、蘇氏の顧客はほとんどが男性で、仕事を通じて女性と知り合う機会は少なかった。40 代を目前にして、母親が独身の身を案じて、インドネシアへ見合いに行くように命じた。彼は不本意ながら母の命令に従い、仲介業者の案内で、インドネシア・西カリマンタン州のシンカワンへ赴いた。彼は女性を選ぶ際、唯一、眉毛にこだわってホンを選んだ。

ホンはインドネシア生まれの華人で、客家人でもある。きょうだいは姉二人、兄一人と弟一人がいる。彼女は中学卒業後、市場で売り子をして働いていたところ、知り合いが台湾人との結婚話を持ちかけてきた。村のほとんどの女性がマレーシアやシンガポール、香港、台湾へと嫁いでいたし、姉は二人ともマレーシア華人に嫁いでいた。もはや外国人との結婚が常識になっていたのも、彼女もそれに従った。

蘇氏とホンは出会いから 3 日後に結婚した。結婚後、蘇氏は仲介業者が渡す結納金とは別に、ホンの両親にお金を渡した。すると岳父母は、すぐさまペンキを買ってきて家の塗装を始めた。蘇氏は、岳父母には貯蓄という概念はないのだろうか、と驚いた。さらに、蘇氏を怒らせる事件が続いた。結婚三ヵ月後に配偶者ビザが下りたので、二人は台湾で結婚生活を始めた。ホンが台湾に渡る時、彼女の両親は娘にインドネシアの銀行の口座番号を教え、毎月送金するように言いつけた。また夫婦が再度、Z 町で結婚式を挙げたとき、インドネシアにいるホンの両親も招待した。彼らは 1 週間だけ Z 町に滞在し、蘇氏は地元の観光地に案内した。つづく 3 週間、彼らは新竹県にいるホンの叔母の家で過ごした。ホンの母方の叔母は、20 年前、西カリマンタン州からやはり客家人の多い新竹県へと嫁いでいた。ホンは両親に貯金を全て渡していたのだが、彼らはそのお金は使わずに、叔母に借金をして台湾を去っていった。彼らは、蘇氏にその借金の肩代わりをするよう、言い残していった。結局、ホンの両親を招待するのに蘇氏が支払った費用は、上記の借金を含めて約 70,000NTD（約 241,360 円、2005 年 6 月 1 日のレート、1NTD≒3.448 円、以下同様）だった。

蘇氏は結婚するときに、二人の結婚はホンの実家を経済的に支援するためのもの

ではなく、新たに家族を築くために行ったこと、今後経済的援助などの期待を持たないで欲しいことを宣言し、ホンの両親も一旦は承知したはずだった。しかしながら、ホンの両親は蘇氏の方針を全く無視し、婿にお金を遣わせたことを当然のことのように感謝もしない。蘇氏や蘇氏のきょうだいは、ホンや彼女の実家に強い不満を抱いたが、両親には一連の事件を隠した。妻の実家が婿に対して金銭の提供を要求していることを知れば、嫁姑関係が悪化することは目に見えていたからだ。

蘇氏は、もし自分が全く妻にお金を渡さなければどういう事態が起きるだろうか、と想像してみた。妻は実家に送金するために家出して、台湾のどこかで働き始めるかもしれない。そうなれば結婚は破綻し、おれは村の笑い物になってしまう。結局、蘇氏はインターネットで国際ブローカー婚をしている、同様の悩みを持つ男性たちと情報交換をし、妻に挙げる小遣いの平均額を参考に、毎月 15,000NTD (約 51,720 円) をホンに渡すことにした。その使い道は妻に委ねればよい。どうやら妻は小遣いの全額をインドネシアに送金しているらしい。

蘇氏は結婚当初、外国人花嫁が金品を奪い逃亡するなどの悪いうわさを聞いて、ホンもそうなるのではないかと疑心暗鬼だった。特に蘇氏はホンが友達と出歩き、悪い知恵を吹き込まれることを恐れ、外出を喜ばなかった。ホンも夫の懸念を察して、外出は控えた。ホンは、結婚して翌年の 2005 年と 2007 年にそれぞれ男児を一人ずつ出産した。またホンは普段、朝 8 時から 15 時まで檳榔店の店番をして、15 時から夫と交代する。夕飯の支度をし、子供たちを風呂に入れ、洗濯をして、子供たちに絵本を読み聞かせたら、一日の仕事は終了だ。蘇氏の両親は、蘇氏の兄と蘇氏の家で半年ずつ生活している。ホンは、義母と自分との関係は義母と義姉よりも上手くいっていると思う。義母は客家語しかできないので、閩南人の義姉とはあまり会話ができないが、ホンとの意思疎通はスムーズだ。また、彼女は客家語に加えて標準中国語の能力もよい資本となっていることを知っている。一般に、ベトナムやタイ出身の外国籍配偶者は、結婚当初から漢字の読み書きができる人はほとんどいない。国際結婚で生まれた子供には学習能力に問題があると懸念されており [cf. 葉 2006:102]、その要因の一つとして母親の中国語の能力が挙げられている。しかし、彼女はインドネシアに住む両親から標準中国語を学んでおり、結婚当初から流暢に話せたので、夫を含め家族みな、ホンの教育能力については信頼している。2010 年 2 月、5 年ぶりにホンは結婚後初めての里帰りをした。台湾を発つ時、義兄に「必ず戻ってこなきゃだめだよ。帰ってこないとお前の夫は悲しむだろうよ」と冗談まじりに釘を刺された。里帰りしたまま、台湾に戻ってこない外国籍配偶者が多いので、義兄はその可能性を疑ったのだろう。実家はホンや姉たちの送金のおかげで、かつての木造建築からコンクリート製の二階建てへと変貌していた。

### 【事例 3】妻を台湾に引き留めるための贈与

張氏（2007 年 56 歳，男性，客家人）は不動産を転売し利益を儲ける傍ら，梨栽培をする兼業農家である。彼の妻グエン（36 歳，キン族）は，ベトナム・ホーチミン市出身である。張氏は四人兄弟の長男である。彼はグエンと結婚する前に，台湾人と二回結婚し，いずれも離婚している。その上，彼は台湾人と一時，内縁関係を結んでいたこともある。張氏は二度の結婚と内縁関係の間に，息子（33 歳，23 歳），娘（34 歳，12 歳）二人ずつの計四人の子をもうけている。長女と長男は，グエンと同年代である。グエン以前の結婚や内縁で生まれた子どもは，いずれも母親と同居している。張氏は，すでに四人の子どもに恵まれていたので，グエンとの間に子どもを作るつもりはなかった。しかしグエンが出産を強く希望したので，二人の間に娘一人（4 歳）が誕生した。

二人の出会いは，張氏が 1998 年にベトナムへ旅行したときに遡る。彼はベトナムでビジネス展開をしている台湾人の招待を受け，ベトナムを旅行した。その際，「結婚でもしてみるか」と突発的に考えて現地の斡旋業者を介して見合いし，グエンと結婚した。当時，張氏は 5,000 米ドル（約 613,500 円，1998 年 12 月 1 日のレート 1 ドル＝122.70 円）と金 5 両分の指輪とネックレスをグエンに贈った。また，グエンの生家には電話が引かれてなかったので，費用を出して引いてあげた。披露宴には 27 卓を設けた（推定で約 270 人を招待）。そのほか，ビザが発給されるまでの間，グエンに中国語の家庭教師を付けた。このように，結婚にかかった総費用はしめて約 500,000NTD（約 1,865,000 円，1998 年 11 月 29 日～12 月 5 日のレート，1NTD≒3.73 円）であった。

張氏の家は四階建てで，一階部分をテナントとして美容院に賃貸している。彼はそのテナント料 15,000NTD（約 52,500 円，2006 年 1 月 1 日のレート，1NTD≒3.5868006 日本円，以下同様）をグエンの小遣いとして渡していた。また，毎年グエンがベトナムに里帰りする際には，10 数万 NTD（約 448,2008 万円以上）を持たせていた。夫妻はホーチミン市に妻の名義で 38 坪 3 階建ての家を購入し，妻方姻族を住まわせていた。姻族が使う家具，家電全ては張氏が購入した。

グエンの生家は父（60 代），母（50 代），男 2 人，女 5 人からなる。生家はホーチミン市の中でも貧民街にあり，かつて彼女の家族は隣人からさえ蔑まれるほど貧しかったという。グエンは，張氏と結婚した動機は「お金のため」だと明言した。「そうじゃなかったら，こんな年上の男と結婚しない。台湾では何があってもお金のためだと思って，両目をつぶって我慢している。夫が私を大事にしなければ，私はベトナムに帰って結婚生活をご破算にすることができる。そうしたら夫は困るで

しよ。夫はそれが分かっているから私を大事にするのよ」と語ってくれた。彼の度重なる結婚歴にZ町の人たちは眉をひそめている。結婚生活を維持する上で、人格、財力、セクシュアリティ面で何らかの欠陥があるのではないかと疑われており、60代を目前にした年齢の面からも再婚相手を見つけることは難しい。グエンは、夫の条件では親密性を共有する相手を見つけることは難しいことを知っており、夫は自分を台湾に引きとめるために、贈与し続けるだろうと考えたのである。

グエンは結婚後、一旦は美容院で働いたが、後に夫に反対されて辞めてしまった。美容院の経営者は、グエンが勤勉で客あしらいもうまいと気に入ってくれたが、夫は妻が勤務中、男に誘惑されるかもしれない、「寝とられ男」になるのはごめんだと心配した。そこで夫は彼女が外で得る賃金の代わりに、前述したテナント料を小遣いとしてあげることにした。ただ、その支給の仕方が変わっていた。夫は小遣いを一月分、まとめて支給するのではなく、毎日500NTD(約1,724円)ずつ支給した。彼女は夫から毎日小遣いをもらうのではなく、働いた賃金を実家に送金したいと語った。なぜなら、夫の機嫌次第で小遣いが貰えるか貰えないかが左右されるからだという。しかし、彼女が外で働く場合、自分の給料で娘にベビーシッターを雇わなくてはならず、給料の大半が消えてしまう。そこで彼女は仕方なく、娘の世話をしつつ家事をしていた。そのほかの時間は、同じくベトナムから嫁いで来た女性と連れ立って過ごしていた。

次第にグエンは家事を放棄し始めた。2006年のある日、夫と口論になった際に、夫がグエンの顔を殴った。グエンは直ちに医師の診断書を取り、台中県社会局に連絡し、夫から家庭内暴力を受けていると訴えた。裁判所はグエンの訴えを認め、夫に対し妻から半径1キロメートル以内に接近することを禁ずる保護命令を発令した。保護命令が発効している間に、グエンは娘を連れベトナムに帰国してしまった。グエンは離婚を要求すると共に、慰謝料として500,000NTD(約1,724,000円)の支払を求めている。張氏は離婚に応じる気はなく、慰謝料の支払いについても自分に過失はないので支払う必要はないと主張していた。その後、張氏がホーチミンに妻名義で買ってあげた家を訪れると、家は他人に転売され、グエン母子と岳父母は行方知れずになっていた。

## 2 考察

国際ブローカー婚では結婚後も、夫方が妻方に贈与し続ける状況が続いている。なぜ夫は贈与し続けねばならず、また妻方姻族と妻は何を夫に返礼しているのだろうか。

事例1の夫婦は、均衡点を見出したケースである。夫は妻の実家に対し、現金や

物品の度重なる贈与をやめた代わりに、妻の名義で不動産を購入してやり、妻方姻族の地位を小作から独立農家へと引き上げ、実家が長期にわたり経済的に安定することを可能にした。さらに、夫は農業指導という自らの専門性を発揮した貢献を通じて、姻族にとって単に「金づる」として居続けるのではなく、彼の人格や能力ならではの贈与を行うことで、同時に「個性」も表現している。彼は妻や姻族の要望に応じつつ、自身にかかる負担を軽減する工夫は、互酬性を保つ上で優れたバランス感覚であるといえる。

他方、妻は生産・再生産労働に積極的に参与することで、夫への貢献を図っている。彼女は前妻の二人の子供の世話を引き受けた上に、梨農園の運営に積極的に参与している。労働の投入で梨農園全体に利益が生じ、夫の満足も得ることができる。また Z 町の農家は「勤勉」であることに、道徳的に高い価値を与えており、「良い嫁」「良い人間」として肯定的な評価を得るためには、何より労働することが必要である。妻は生産・再生産労働でもってその負債を返還し、そればかりか今や農園の経営も家族の福祉の維持も、彼女抜きでは成り立たない状況を作りつつあるといえる。

次に事例 2 では、彼らが夫婦および姻族間の互酬性の均衡点を慎重に探っていった様子が伺える。結婚当初、夫と夫方姻族は妻方姻族のふるまいに憤懣やるかたなしであったが、小遣いをあげ妻を通じて間接的に妻の生家に贈与しないと、妻の不満が募り、結婚生活が破綻する可能性が懸念された。そこで夫は他の国際ブローカー婚カップルに倣い妥当と思われる小遣い額を設定し、その小遣いを送金するなり、使うなり、処分の方法は妻に委ねることにした。夫は間接的に妻方姻族に贈与することで、彼自身を含め、彼の家族が妻方姻族に不満を抱かないように配慮した。また、妻側も小遣い以上の現金を求めるなど、さらなる贈与を夫に要求しておらず、贈与額は一定程度に保たれることになった。

妻は男児を二人も産み、男子継承者を残すことに貢献した。また、彼女は夫の事業を二人三脚で助け、家事や育児への取り組みも怠っていない。こうした妻として嫁としてホンの働きは、夫や姑らを満足させている。ただ、ホンの里帰りが認められるまでに 5 年かかった点を見ると、ホンが「金目当て」で蘇氏と結婚したのではなく、今後も結婚生活を維持していく意志があると信頼されるまでに長い歳月を要したと言える。

最後に事例 3 は、夫婦が妥協点を見いだせず、結婚が失敗に終わったケースである。本事例では、まず夫・張氏の結婚歴の多さが際立っている。複数回にわたる結婚・内縁関係が可能であったのは、ひとえに不動産業を営む張氏の経済力によるものであったのだろう。グエンとの結婚では国際ブローカー婚の通常のケースとは異

なり、大規模な披露宴を挙行し高額の間納金を支払っている。また、妻方姻族のために電話回線の開通から家電製品の購入、妻名義で不動産を購入するなど相当な額の贈与を行ってきた。

妻のグエンの発言から、夫からの継続的贈与と丁重な扱いが、結婚の継続と交換されていたことが伺える。夫から妻および妻方親族に贈与されたものは、現金や不動産、家電製品、家具、電話の加入権にのぼる。妻から夫へは、家事や育児、そして「連れ合い」として夫につきそうことで得られる感情の満足感、言い換えれば情動労働である。夫の張氏は子どもの出産を希望していなかったもので、当初妻には家事労働と情動労働の提供を期待していたものと思われる。

グエンは夫が贈与した内容や金額に不満であったのだろうか、あるいは結婚自体に不満で、十分財産を得たと満足したために、ベトナムへ帰り事実上、結婚生活を収束させる手に出たのか、今となつては彼女に確かめる術は無い。彼女の周到な点は、家庭内暴力法を熟知し、夫が暴力を振るうや否や、接近禁止命令を申請し、夫が自分や娘に近づけない間にベトナムに帰った点と、娘を自分の手元に置いた点である。接近禁止令は、家庭内暴力を受けた配偶者、特に女性を保護する目的で制定されたものであり、国際ブローカー婚の女性配偶者は不幸なことに、しばしばその法律の保護を受けている。「社会的弱者」であったはずのブローカー婚の女性配偶者は、法律を活用し夫を遠ざけている間に、悠々とベトナムへ帰ってのけたのである。グエンは初め切り札として娘を手元に置き、一方の夫は離婚に応じないことで、関係修復の手がかりを残そうとしていたが、もはや親子の行方は知れず、二人の結婚は完全に破綻した。

以上三つの事例から、国際ブローカー婚の場合、妻は結婚後も生家に貢献する義務を生家から負わされており、それが完了するまでは夫にも継続的贈与が要求される。彼女たちが贈与内容に満足した時、支払いは終了すると言えよう。事例1は夫が妻名義で土地を購入し、妻方姻族を小作から自作農に引き上げてあげたことで、姻族の経済的自立を促し、一方的な財の支払いは終了している。事例2は、夫は妻に平均的額の少遣いを与え、妻にその処分を一任している。その金は妻方姻族に渡っていると考えられるが、夫としては、妻方への直接的、継続的贈与は終了していることになっている。妻のほうは、子供の出産や養育、家事、農作業や商売に積極的に参加し、貢献を重ねることで、夫や夫方への「負債」を返している。しかし、妻の生家は「負債」返還には貢献しておらず、財を収受するのみである。以上二例は、夫の妻方への継続的贈与をめぐり、妥協点が見出され、結婚生活が継続している。他方、事例3は夫から妻方への一方的な贈与が終了しないまま、婚姻が破綻してしまった。この事例では、妻は度重なる夫からの贈与に満足せず、妻はつい



に張家の一員となりえなかった。

台湾漢族同士の結婚ならば、結婚後は姻族が互いの人生儀礼において儀礼的財を贈り合い、時には経済的な貢献もなされる。しかし、国際ブローカー婚では、そうした互酬性は形成されず、結婚後も夫から妻を通じて妻方への贈与が求められるばかりである。こうした継続的贈与は、いわば婚資を分割払いしているのだとも考えられよう。国際ブローカー婚の場合、結婚にかかる総費用、婚資とも台湾漢族同士の結婚に比べて極めて少ないことを先述した。台湾漢族の夫と妻方は、小額の婚資で嫁を手に入れ、「買って来た」感覚を持ったが、婚資の支払いはまだ終了していなかったのである。婚資未払い分は、結婚後、不動産や家電などの形で夫から妻方へ贈与され、贈与が終了して初めて、妻は夫方の一員となり、安定した結婚生活に入るであろう。

## おわりに

本論は、台湾台中県のZ町に住む国際ブローカー婚のカップルを事例に、彼らの結婚を特殊な結婚の一形式として捉え、婚資や持参財の内容、結婚に伴い派生する姻戚間の互酬性という構造的側面に着目し、贈与と返礼の内容を検討した。台湾漢族同士の結婚と国際ブローカー婚では、前者は家格や経済的能力が相当する家同士の結婚を望ましいとしており、後者は国家間の圧倒的な経済格差を背景にしている。この差異が、結婚後の互酬性に大きく影響している。後者では、夫は妻を少ない婚資で手に入れ、妻方の生家は娘を売ったかのようにみなされる。見合いの際、相手を選ぶ段階では、主導権は台湾漢族男性にあり、出国して生家へ送金する幸運を望む女性は劣位におかれることから、女性の基本的人権が侵されているとして、人身取引と連想されるのであろう。しかし、結婚後の夫方からへの継続的贈与と、家庭生活を営み、家族の再生産に貢献する妻の返済の実践を鑑みれば、その認識は必ずしも当たらないと言える。従来、国際ブローカー婚にまつわる財の贈与に関して、結婚時は夫が少ない婚資で妻を入手できることが人身取引同然であるとか、結婚後、妻は生家へ送金するばかりで夫方が損害を被り、結婚生活の安定に貢献していない、といった不満をZ町内外で耳にしてきた。本論は互酬性の構造に立ち戻ることによって、批判を呼んだ事象に底流しているメカニズムを明らかにした。

台湾漢族の結婚や家族を考える時、近代性、グローバリゼーションについての理論を無批判に適用することはできない。片やブローカー婚が新規結婚件数の2割を占めるといふ世界的にも先鋭的な状況が作り出され、片や近代家族イデオロギーではとらえきれない「前近代的な」家族観が脈々と受け継がれている。こうした台湾

漢族の結婚、家族の有り様は、一方で宋代に成立していた家父長制や労働力の売買の歴史に私たちの目を向けさせ、また一方では「愛情の場」としての家族イデオロギーに疑問を抱かせる。今後も、結婚前には感情的基盤のないまま結ばれた国際ブローカー婚の夫婦が「家族」として紐帯を築き、新たな家族像を描いていく様子を見守っていきたい。

なお、本論では国際ブローカー婚に限定した議論を行ってきたが、経済的格差がありエスニシティを超える結婚としては、従来からオーストロネシア語族系先住民や外省人、また台湾漢族女性と外国人男性との結婚もある。このような多様なパターンにおける互酬性を、国際ブローカー婚の事例と総合して検討すれば、国際ブローカー婚が成長するメカニズムの解明により一層近づくこととなろう。この点については今後の課題としたい。

## 謝 辞

本稿が依拠する現地調査は、台湾政府教育部特別奨学金（2003、2004年度）、財団法人交流協会日台研究支援事業助成金（2007年度）、財団法人日本学術振興会特別研究員奨励費研究「再生産労働の国際移転と台湾漢族の家族・親族の再編をめぐる社会人類学的研究」（代表：横田祥子）からの資金援助で可能になった。調査地にて調査にご協力いただいた関係者各位には、厚く御礼申し上げます。

## 参 考 文 献

陳炎正（編）

1995 『東勢鎮誌』 台中：台中県東勢鎮公所。

陳運棟

2007 「源流篇」『台湾客家研究概論』徐正光（編）、台北：南天。

Constable, N.

2005 A Tale of Two Marriages International Matchmaking and Gendered Mobility, In *Cross-Border Marriages: Gender and Mobility in Transnational Asia*, edited by Constable, Nicole, pp.166-186, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Davin, D.

2007 Marriage Migration in China and East Asia, *Journal of Contemporary China*, 16(50), February: 83-95.

E・M・リーチ

- 1991 『社会人類学案内』長島信弘(訳), 東京: 岩波書店. (Leach, E. 1982 *Social Anthropology*, London: William Collins Sons & Co. Ltd.)

中生勝美

- 1991 「婚姻贈与と婚姻連帯——漢族の婚姻体系と地域性」『国立民族学博物館研究報告別冊』14: 161-197.

内政部戸政司

- 2004 「台閩地区各縣市鄉鎮市区結婚人数按新郎新娘双方国籍分 93 年 1 月至 12 月」.
- 2005 「台閩地区各縣市鄉鎮市区結婚人数按新郎新娘双方国籍分 94 年 1 月至 12 月」.
- 2006 「台閩地区各縣市鄉鎮市区結婚人数按新郎新娘双方国籍分 95 年 1 月至 12 月」.
- 2008 「各縣市外籍配偶人數與大陸(含港澳)配偶人數按取得證件 76 年 1 月至 97 年 06 月底」.
- 2010 「我国人與外籍人士結婚統計 99 年 9 月」

内政部入出國及移民署移民事務組

- 2010 「外僑居留人數統計 99 年 9 月」

内政部入出國及移民署、戸政司

- 2010 「各縣市外籍配偶人数按性別及原属国籍分 99 年 9 月」

Sassen, S.

- 2002 Global Cities and Survival Circuits, In *Global Woman: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*, edited by Ehrenreich, Barbara and Arlie Russell Hochschild, pp.254-274, New York: Owl Books.

申雨慧・邱榮舉

- 2004 「臺灣客家運動之緣起與發展——以『客家風雲』雜誌為探討中心」『台灣客家運動與社會發展研討會論文彙編』台北: 台湾客家公共事務協會.

鈴木清一郎

- 1934 『台湾旧慣冠婚葬祭と年中行事』台北: 台湾日日新報社.

Truong, D.

- 1996 Gender, International Migration and Social Reproduction: Implications for Theory, Policy, Research and Networking. *Asian and Pacific Migration Journal*, 5(1): 27-51.

植野弘子

1987 「妻の父と母の兄弟」『民族学研究』51(4): 375-409.

2000 『台湾漢民族の姻戚』東京：風響社.

王宏仁

2001 「社会階層化下的婚姻移民與國內勞働市場——以越南新娘為例」『台灣社會研究季刊』41: 99-127.

Wang, H.

2007 Hidden Spaces of Resistance of the Subordinated: Case Studies from Vietnamese Female Migrant Partners in Taiwan, *International Migration Review*, 41(3): 706-727.

Watson, R. S.

1991 Wives, Concubines, and Maids: Servitude and Kinship in the Hong Kong Region, 1900-1940. In *Marriage and Inequality in Chinese Society*, edited by Watson, Rubie S. and Patricia Buckley Ebrey, pp.347-368, California: University of California Press.

夏曉鵬

2002 『流離尋岸——資本國際化下的「外籍新娘」現象』台北：唐山.

葉肅科

2006 『外籍與大陸配偶家庭問題與政策——社会資本／融合觀點』台北：学富文化事業有限公司.

張翰璧

2007 『東南亞女性移民與台灣客家社会』中央研究院人文科学研究中心亞太区域研究專題中心.

朱柔若・劉千嘉

2005 「大陸新娘在台湾的認同問題探討」『社区發展季刊』112: 179-196.